

家であり、絶大な經世家であり、巨大な國士であつて、その爲すところは實に絶倫無比の大丈夫であつた。更に精の偉大な點は、後世にまで感化を與へたその高邁な人格と、東亞百年の大計を策した、その卓越した大識見とであつた。

——名古屋千種區田代町坂上加藤方 加藤 靖——

一三、海軍大將 八代六郎



ある夏の暑い日、六郎少年は村の子供たちと連立つて、木曾川へ水泳ぎに行つた。木曾川は連日の雨で水量が増し、濁流滔滔としてすさまじい勢であつた。犬山城の崖が濁流に洗はれて、青葉に埋もれた天主閣が、今にも崩落ちさうにさへ思はれた。

「これはえらい水だ、とても泳げんぞ。」

さすがの河童連中も、矢のやうに早い水勢と、兩岸の岩を噛むすさまじい水音に怖ぢけついで、泳ぐ勇氣が出なかつた。ただ岸に立つたままでも、もの凄い流れを見てゐるだけである。この時六郎少年は

「何だこれ位の水に怖ぢる奴があるか、皆が泳げなけりや俺だけ泳ぐぞ。」

小さいに似ず恐ろしく度胸のいい彼は、着物をかなぐりすてて裸になつた。

「あぶないからよせよ。」

「なに、大丈夫だ。」

皆の止めるのも聞かず、ざんぶと奔流へ身を躍らした。

「あぶない、あぶない！」

河童連中が心配して叫んでゐる中に、六郎少年は拔手を切つて、二百米ぐらゐ押流されたが、たうとう向う岸についた。

「今度はそちらへ歸るよう。」

一息つく間もなく、またざんぶと飛びこんで無事にこちらの岸へ着いた。河童連中は目を丸くしてただ驚くばかりであつた。

この六郎少年こそ、日本海海戦の前夜艦上で悠悠尺八を吹奏して、その豪膽と風流とを一世に謳はれた、海軍大將男爵八代六郎その人である。

八代大將は尾張國樂田村の農家松山庄七の三男として、萬延元年正月三日に呱呱の聲をあげた。松山家は、楠氏の殘黨が尾張に落ちのびて土着したものであるといはれ、田畑や山林も多く所有し、代代庄屋をつとめて來たこの地方での名門の家柄であつた。父庄七は立派な體格の持主で、力が強く角力が好きで田舎角力の大關どころであつた。ま

た親分肌のところがあり、人の面倒を見ることが好きであつたので、人人から畏敬され親愛されてゐた。

兄の義根は八代大將より餘程年長で、父に似て體力が衆にすぐれ、殊に劍道ではこの地方で彼の右に出る者がなかつた。又熱烈な勤皇家で、幕末維新に當つて尾張藩に磅礴隊といふ勤皇黨が組織された時、率先してこれに加はり、征東總督有栖川宮に従つて江戸に入り、上野の彰義隊討伐のときには、敵彈を股にうけたがひるまず奮戦して、大いに功をたてた。幕末維新の争亂も鎮まり、磅礴隊が解散されてからは郷里に歸り——松山義校——といふ私塾を開いて青少年を教育した。また郡長となり、代議士となつて政界にも大いに活動した。

大將の姓が八代となつたのは、十歳のときに、水戸の浪士八代逸平の養子となり、八代家を繼いだからである。八代逸平は、武田耕雲齋の天狗黨に加はつて、はるばる水戸から京都へ上らうとした。途中の大藩小藩の障害を突破つて、今や上洛一步前といふところで加賀藩に計られて、黨の大半は敦賀の濱で悲壯な最期をこげてしまつた。八代逸平はこの難を免れて暫く京都に居た。尾張藩に磅礴隊が組織された時、迎へられて隊

の監察となつた。隊士は血氣旺んな荒武者が多いので、これらの隊士を壓へるには、腕もあり學問もあり見識もある者をご物色したら、京都の大原三位が八代逸平が適任であらうといつて推薦したのである。大將の兄義根と逸平とは、この隊によつて相知つたのである。そして次第に親密の度が増し肝膽相照す仲となつた。

明治二年逸平は重病の床についた。逸平は見舞に來た義根に寢れ果てた顔をあげて言つた。

「俺も今度は駄目だ。俺は貴公に最後の願がある。貴公も知つてゐる通り俺には親も兄弟も子もない。全くひとりぼちの人間だ。だから俺はいつ死んでも命が惜しいとは思はない。併し俺が死ぬと祖先の祀を絶たねばならぬ。死んで行く俺にはこのことだけが氣にかかるのだ。」

「ぢや貴公の心残りは繼嗣の問題だといふのか。」

「さうだ。その通りだ。貴公へ願ひといふのは君の弟の六郎を養子に貰ひたいことなんだ。そして八代の家を繼いで貰ひたいんだ。これは俺の、一生のたつた一つの願ひだ。頼む。この俺の無理を聞いてはくれまいか。」

義根は手を膝の上においてじつと聞いてゐた。義根にとつて六郎は大事な弟である。今まで一度だつて他へやらうなどは考へたことがなかつただけに、この逸平の願ひは意外であつた。が併し、孤獨の逸平が淋しい顔に涙さへうかべて哀願するのを聞いてゐると、義根にはこれを拒む勇氣は出なかつた。寂しく旅に病み、旅で死んでゆく逸平が寧ろ氣の毒でならなかつた。暫く考へてゐた義根はやがて拳で膝を叩いて言つた。

「よし、承知した。いづれ父とも相談の上、貴公の家は六郎に繼がせることにしよう。安心してくれ。」

逸平は手を合せて禮を言つた。うれし涙が寢れた頬を後から後から流れた。

逸平は養子の六郎少年を枕頭に坐らせて

「國家のために盡せよ。」

と水戸の勤皇精神を小さい胸に吹き込んだ。そして三十歳の若さで死んでいつた。

大將はこの父、この兄、この養父から、多くの優れた精神的感化を受けて成長し、やがて典型的な武人としての大人格を完成したのである。

六郎少年は十一二歳の頃、犬山藩の敬道館へ通つて勉強した。毎日二里の道を嚴寒の

時でも素足に草鞋をはき、雨の日や雪の日は、體よりも大きな笠をかぶつて一日も缺席することなく通つた。成績は拔群であつたが、悪戯の方も亦拔群であつた。

「おい、今日は豚狩りをやらうぜ。豚は俺がつれてくる。」

さういつて、どこかへ飛んで行つた六郎は一頭の大きな豚をひつぱつてきた。それを學校の裏の藪の中へ放つて、源平二軍に分れて少年たちが追ふ。竹槍で突倒した方が勝である。少年たちは、我こそ一番槍の功名をたてんものと豚をめがけて追ひまくる。

豚は大きなからだを重さうに「ぶう、ぶう」鳴きながら逃げまはる。六郎はこんなときいつでも一方の大將で、全軍を指揮して真先に突撃した。豚公は小さいしつぽをふりふり逃廻つたが、つひに、あはれ六郎の槍先にかかつて壓倒されてしまつた。學校から家へ歸つてもやはり餓鬼大將で、樂田村の山野狭しとあばれ廻つた。

彼は十四歳のとき、愛知英學校へ入學した。坪内雄藏博士などご机を並べて勉強した。中學生となつた彼は大いに勉強もしたが、相變らず豪傑振りを發揮した。小倉の袴を裾短かにはいて、肩で風を切つて大道を濶歩した。

暑中休暇になつたので、同郷の一友人と犬山街道をてくてく歩いて歸省したときのことである。暑い日中を汗だくだくになつてやつと家近くへきた時、突然六郎は立止つて

「やつ、しまつた。」

と叫んだ。友人はびつくりして

「何だ、そんな頓狂な聲を出して、どうしたのか。」

「うん、成績表を學校へ忘れてきた。」

「何だ、成績表を忘れたのか。」

「俺はこれから學校へ引返して持つてくるから、君は一足先に歸つてくれ。」

「成績表ぐらゐ、どうだつてよいぢやないか、これから四里の道に戻るなんて大變だよ。」

「いや、成績表は必ず兄上に見せなければ相すまん。」

友人の止めるのもきかず、すぐその足で今來た道を引返していつた。

兄の義根は六郎を大變可愛がつたが、この弟は凡物ではない、きつと將來大成するとひそかに期待してゐたので、嚴格な教育方針をとつてゐた。外では豪傑ぶりを發揮した六郎も、流石に兄にだけは極めて従順でその命をよく守つた。

明治十年十八歳のとき海軍兵學校へ入校した。六郎は早くから海軍を希望してゐた。もし海軍軍人になれないなら俠客になるといつてゐた。しかし俠客にもならずめでたく多年の希望の海軍兵學校に入學し、海軍生活の輝かしい第一歩をふみ出したのである。明治十八年、少尉になつた時、まつ先に郷里の兄へ寫眞と共に任官を報告した。兄の義根はどんなに喜んだか知れなかつた。二十年には大尉になつた。

明治二十六年、雪のシベリヤを越え、朝鮮の仁川に泊つてゐたときのことである。ある料亭で清國の水兵等が酔拂つて、しきりに荒れ狂つてゐた。器物を投げる、椅子を毀す、硝子を割る。さんざんの狼藉ぶりに誰も手の出しやうがなかつた。通りかかつた八代大尉は、見るに見かねてそこへ跳りこんだ。はじめはおとなしく注意をしたが、相手は酔拂つてゐる上に、大國の水兵であることを鼻にかけて何と言つても止めない。益々荒れるばかりか大尉に攫みかかつて來た。大尉は性來の俠氣から面倒なごばかり、いきなり二三人を鐵拳でなぐり倒した。これを見た他の水兵たちは、こんな豪傑にかかつて

はたまらないと、外へ逃げ出してしまつた。大尉は相手の脆いのに呆れ返つてそこを出て道を歩いてゐると、後からいきなり棍棒で大尉の後頭部を殴りつけた者がある。先程の水兵の一人が正面から向つては適はないので、油斷してゐるところを力まかせに撲つたのである。さすがの大尉もこれには參つてふらふらと街上に倒れた。水兵はしめたごばかり馬乗りになつて、なほも殴りつづけよう棍棒を振り上げたとき、大尉はす早く腰の短劍を抜いて相手のわき腹に突立てた。水兵は、きやつ！と悲鳴をあげながら逃げていつた。

八代大尉がかういふ武勇傳を土産に歸朝すると、間もなく日清戦役が始つた。大尉は吉野の分隊長として勇猛ぶりを發揮し、數數の戦功を立てた。

日清戦役が終ると、露國公使官附武官として露都に赴き、二十九年には少佐、三十年には中佐と累進した。

◇

明治三十七年、東洋の空は暗雲低迷して、日露の開戦は避けられない状態となつた。

併し當時世界最大の陸軍を有するロシアとの開戦は、國運を賭する重大事であるから、當局は慎重に慎重をかさね、なかなか決心がつかなかつた。この時八代將軍は開戦論の急先鋒で、當局のぐすぐすした態度に業を煮やした。

「こんな風だと戦争はやらないかも知れない。併し今戦争をやらなければ日本の將來は駄目だ。」

と、やつきになり、たうとう東郷大將のところに押かけていつて、盛んに開戦論をまくし立てた。東郷大將はただ黙黙として聞いて居られたが、最後に一言

「東郷を信じなさい。」

と力強く言はれた。將軍は東郷大將の心中深く既に決して居られることを知り、満足して歸つた。

やがて開戦となり、旅順の閉塞が始まると將軍は東郷大將に向つて

「わしを閉塞隊の總指揮官にしてほしい。」

と直談判をした。だが東郷大將は靜かに頭を横に振つて

「今、我が艦隊は君を失ふやうなことがあつてはならん。」

といつて、どうしても聞き入れなかつた。當時將軍は海軍部内きつての露國通で、將軍を失ふことはわが軍の非常な損失であるからであつた。

日本海海戦の前夜である。

空には星の瞬く靜かな海面を、腸を斷つやうな妙なる尺八の音が高く低く流れて來る。

皇國の興廢をこの一戦にかけた明日の大激戦を知らないもののやうに、八代將軍は淺間艦の甲板に坐つて、悠悠千鳥の曲を心ゆくまで吹き鳴らすのである。

——鹽の山差出の磯の友千鳥、君が御代をば千代八千代とぞ鳴く——

といふ千鳥の曲は、將軍がいつも好んで吹奏された名曲である。戰國争亂の陣中において、悠悠風流を樂んだ古の英雄のことも偲ばれて、まことにゆかしいかぎりであつた。

明くれば五月二十七日、我が國未曾有の大海戦の火蓋は切つておとされた。

——皇國の興廢この一戦にあり 各員一層奮勵努力せよ——

旗艦三笠に掲げられた信號を見て、將兵は一死君國に報ゆるときは來れりと、勇みに勇んで戦つた。各艦の砲口は一齊に火を吐き、砲聲殷殷として海上を壓し、彼我の艦隊は

互に入り亂れて、日本海は一大修羅場と化した。

八代將軍は司令塔をこび出して、マストの上に突立ち上り、きつと敵艦を睨み据ゑ、大聲をあげて全艦の將兵を指揮した。淺間の砲口は火を吐いて唸りつづけ、一弾一弾は確實に敵艦に命中した。淺間も敵から猛烈な砲撃を受けた。敵の一弾は淺間の右舷艦尾に命中し、内部で炸裂したため舵の自由がきかなくなつた。艦は隊列を離れてぐんぐん敵に近づき

「さあ撃て！」

と言はぬばかりに全身を露出した。敵からの集中射撃をうけ満身創痍となり、孔のあいたところからは海水が滔滔と侵入した。艦尾はために四寸も沈下した程であつた。

——吾、舵に故障あり——

かういふ信號が掲げられた時は、實際どうなるだらうかと皆が心配したが、八代將軍は泰然自若たるもので

「艦は大丈夫だ。もつと撃て、もつと敵に近づけ。」

と盛んに號令を下して部下を鼓舞激勵した。勇將のもとに弱卒無しで、將軍の修羅王の如き勇氣に勵まされて、將兵はここを先途と戦つた。そのうちにどういふはすみか、幸にも故障のあつた舵が自由に動き出した。そこで再び隊列に加はり引續き敵艦を砲撃した。

日本海海戦における八代將軍の奮戦ぶりは、全くめざましいもので、將軍の剛勇ぶりはこの時遺憾なく發揮せられた。



日露戦役がすむとすぐ將軍は獨逸公使館附武官、大使官附武官として駐獨し、歸朝するや第一艦隊司令官、第二艦隊司令官、海軍大學校長を経て舞鶴鎮守府司令長官となつた。

大正三年一月、山本内閣のとき、かの有名なシーメンス事件が突發した。帝都はこれがために騷擾の巷と化し、衆議院でも貴族院でも大問題となり、終に内閣は總辭職するに至つた。次に大命を拜受したのが大隈伯であつた。

この大隈内閣の組閣の衝に當つたのは加藤高明伯で、彼は名古屋時代からの知合ひで

ある舞鶴司令長官八代將軍に着目して招電を發した。將軍は招電が何で有るかも知らないで副官一人を伴つて上京した。其の晩、帝國ホテルで徳富蘇峰からはじめて招電の内容を知らされた。

「君がどうしてもこの大役を引受けねばならない。」

蘇峰は非常に熱辯を振つて、極力將軍の入閣をすすめた。翌日加藤伯と會見したが、加藤伯も熱心に入閣をすすめた。

「よろしい、誰もやりてがなければ海軍のためだ、わしが引受けよう。」

將軍の一諾によつて、大隈内閣が出現した。海相となつた將軍は、天下を騒がしたシメンス事件を、さながら快刀亂麻を斷つが如くあつさり片付けてしまつた。その爲、當時將軍の身邊は危く、刺客がつきまとつてゐた。併し將軍はそんなこと位少しも恐れてゐなかつた。死は覺悟の上である。將軍は朝家を出る時、夫人に向つて

「わしの顔が二度と見られるとは思ふな。」

と、言つてゐた。御國に御奉公のためには如何に胸中深く決してゐたかがわかる。

將軍は常に公明正大で、一點の私心を交へなかつた。正しいと信ずることは斷乎とし

て行つた。やがて大浦内相の選舉干渉、瀆職事件等で首相と意見が對立し、憤然として辭表を提出したのも將軍の正義感からである。辭表を出した將軍は、早早にして官邸を引拂ひ、京都の黒谷に悠悠閑居してゐた。



將軍は晩年、小石川區原町にささやかな一家を構へ、悠悠自適し、好きな酒を嗜みながら清貧に安じてゐた。——食つて行ければそれでよい、それ以上のものは贅澤だ——と言つて家の中には目星しい道具は一つもなかつた。

——無欲なれば則ち行ふところ自ら簡なり——といふ扁額を掲げて、質素簡易な生活をしてゐた。

「わしは死ぬときは無一物で死ぬ。」

これは將軍が生前よく人に語つた言葉であるが、將軍はこの言葉通り一物の財貨をも残さず死んでいつた。

將軍は 明治大帝の御聖徳を追慕するあまり、御製十萬首の謹書を思ひ立ち、齋戒沐

浴して一枚一枚と短冊に認めた。これがため健康を害ねたこともあるが、恢復するさま
た書き續けた。このため遂に再び起き上ることの出来ない程の長い病床についてしまつ
た。

昭和五年六月三十日、將軍の臨終は近づいた。

將軍は最後の一刻まで意識が明瞭で、枕頭に集る近親や知人に嚴肅な口調で言はれ
た。

「わしは生命の源へ歸つて行く。わしはあるやうにあつた。わしの生涯は赤裸裸であ
つた。わしは無限の感謝とお詫びをしてこの世を去つて行くのだ。」

と、靜かに眼をさめて逝かれた。將軍は晩年日蓮宗を深く信じてゐたので、その最期は
まことに高僧のそれの如く安らかな大往生であつた。

——丹羽郡樂田尋常高等小學校 伊藤 竹芳——

一四、發明王豊田佐吉と其の母

【豊田佐吉事績の梗概】佐吉の父は大工であつたので、佐吉は小學校卒業後父の業を
習つてゐた。佐吉は夙に器械の製作に興味を有し、二十五歳の時豊田式人力織機を發
明し、後名古屋に居を定め、明治三十年三十一歳の時動力織機を發明し、知多郡乙川
の石川藤八と共力して乙川綿布合資會社を設立し、豊田式木製動力織機六十臺が運轉
した。これが日本製の動力織機の嚆矢である。

明治三十五年には豊田式自動織機を發明した。佐吉は二十一歳から六十四歳長逝の
年まで四十四年間に特許を受けた發明百十九件で、外國の發明特許を受けてゐるもの
十三件にのぼつてゐる。ここに豊田式新自動織機の出現は世界驚異の的となつた。

當時世界第一の織機會社を以て自任してゐた英國プラット會社の織機も一人五六臺
以上の操作は不能であつたが、豊田新自動織機は一人にて五六十臺を操作することが
出来、十倍以上の能率を擧げるに至つた。

プラット織機會社はこの威力に色を失ひ、昭和四年十二月豊田プラット協約を結び
十萬磅を以て歐洲地方に於ける專賣權を譲り受けるに至つた。織機製作について世界
の最權威であつたプラット會社が、豊田に叩頭したことは獨り世界織布史上の大なる
出来ごとであるだけでなく、日本國民の創造的知能を世界に知らしめる輝かしい一事
であつた。



佐吉は今から凡そ七十年前、慶應三年二月十四日、濱名湖のほとり、濱名郡鷺津町大字山口に生れた。彼の少年時代は明治維新の大改革が着着と歩みを進めて、新しい日本の建設に夜も日も足らぬ頃であつた。

明治元年五ヶ條の御誓文が天下に公布せられて維新の進路がきまると、明治四年岩倉具視一行の歐米派遣となり、次いで留學生五十餘名が海外に飛立つた。續いて學制令徴兵令の發布、官制改革などが實施せられ、明治十四年には國會開設の詔まで下つた。この詔が下ると、青年達は新しい日本の姿に齊しく眼を瞠つた。

澎湃として押し寄せる文明開化の波は、此處濱名湖の岸邊にも打寄せた。佐吉は同じ村の若者等と共に、毎夜村はづれの觀音堂に集つて輪讀會や討論會を開いて、若い血潮をたぎらせてゐた。何時も話が國家問題に移ると、若者等は悲憤慷慨の果て、遂には號泣する者まであつた。明治十六年頃の世間は恰も不景氣のどん底に喘いでゐた時で、吉津村（今の鷺津町）は地の利に恵まれない寒村であつたから、それが殊の外ひどかつた。中でも彼の生地である山口といふ部落は、村中一番の小さい里で、且しつかりとし

た有力者もなかつた爲に、他の部落から始終侮辱や迫害を甘受せねばならなかつた。明治二十年になつて東海道線が開通して、この村も俄かに惰眠から醒まさればしたものの、まだ昔からの因襲が根強い力を持つてゐて、依然として元からの惰勢に引づられて、年年歳歳里人の生活が苦しくなるばかりであつた。そこで勢ひ祖先傳來の田畠を賣食ひしたり、止むを得ず墳墓の地を他に求めて、流浪の旅に出る者が續出して、ここ數年間に凡そ二割の戸數が減つて來た。

かういふ慘憺たる部落の現状を目撃して佐吉の心頭に燃え立つたものは、何としてもこの村の貧乏を救はねばならないといふ押へ切れない郷土愛であつた。

同志と共に、輪讀會で新聞や雑誌を見て見聞を廣めてゐる中に、日本の國がまたこの村と同様貧乏のどん底に喘いで居り、世界列強に伍して、非常な難局に立つてゐる事が追追と判つて來た。先づ佐吉を憤激せしめたのは、當時に於ける我が國の外交であつた。開國して間のない日本は、事毎に歐米諸國から蔑にされてゐた。通商條約など殆ど彼等の屬國扱にされてゐるやうな不利な立場に措かれてゐた。かうした國家の苦境は、多感な彼の心を極度に憤激させた。そしてこれは結局日本が貧乏だからだ。日本人の力

が足りないからだ。どうしても一日も早く外國に馬鹿にされない國にならねばならぬと彼の郷土愛は、やがて祖國愛へと移つて行つた。



春である。濱名湖を渡つて来るそよ風も心地がよい。若草は土手の堤に萌え、小鳥は朝から囀つてゐる。教室の窓には、もう櫻がちらほら咲きかかつて、いかにも暖い晝である。

新庄小學校の増築を請負つた父と共に、今日も亦佐吉は仕事に来てゐた。晝休の一服をしてゐると、教室から講義の聲がもれてくる。今しも佐田先生が晝休を利用して、上級生に「西國立志編」の課外講義をしてゐられるところである。これは中村正直先生が、英國のスマイルスの「自助論」を翻譯して明治四年に出版せられたものである。進取の氣象がはち切れるばかりであつた當時、獨立自尊の大精神を説かれたこの書物は、各學校でも教科書や課外講義に用ひられて、明治時代一かどの人物は、皆この名著に親んだものである。

「今日は發明家の巻をお話する。この巻には新しい機械を發明した人々が、その國の利益は勿論、世界の文明進歩に大變な功績を残した事が書いてある。中でも千七百六十四年、英國のハーグスリーブスが紡績機械の發明をして今迄の八倍を紡ぐ事が出来た。續いて五年後にアークライトが水力で動かす紡績機械を發明した。この人は貧しい家に生れ、理髮屋の小僧にやられたが、さんざんな苦勞を嘗めた後、たうとう發明に成功して百萬長者となつた。そして國王から爵位まで授けられたが、これに安心せず續いて研究し、遂にワットの發明した蒸氣機關を應用してこの機械を動かすことに成功した。

外國ではこの様に大仕掛な機械で、どんどん仕事をしてゐるのに、情ないかな日本で、未だにお婆さんがぶいぶい紡いだり、ちやんからちやんから織つたりしてゐるといふわけだ……。」

窓邊には、いつの間にか吸ひ着けられたやうに聽入つてゐる佐吉の姿があつた。

「さうだ。發明だ。外國に負けない日本にするには立派な發明をする事だ。ようし……。」

一日の仕事を終へた彼は、高鳴る胸の感激をおぼえながら、夕闇の校庭を後にするのであつた。



佐吉の願望がとどいて、佐田先生から西國立志編を手にした時は、鬼の首でも取つたやうな氣持で何遍も何遍も繰返して讀んだ。仕事に行く時には何時も腹掛の中に入れて出た。

此の頃の佐吉は體もめつきり丈夫になつて、仕事も上手になつて來た。實直で評判のよい父からみつちり仕込まれた上に、生來の器用と熱心がものをいつて、今では老練な大工にも負けない程の腕を持つやうになつた。

先年から色色と不幸が續いて、その爲に親譲りの田畑を餘儀無く人手に渡した事が、律義者の伊吉の身には何よりも苦しいことであつた。來る日も來る日も身を粉にして働いたけれども、打續く不景氣と、佐吉を頭に四人の子供を抱へた貧乏所帯では、その日その日の暮しにも不自由する有様であつた。

妻のおまいは朝早くから夜遅くまで賃機織りに一生懸命になつて家計を助けた。漸く此の頃になつて子供の世話もいくらか手がかからなくなつた上に、かうして佐吉が一人前の仕事をしてくれるやうになつたので、一家の暮しは追追樂になつて行つた。父は少しづつでも貯へが出來かけた事を心から喜んで

「佐吉や、もう一息だ。かうして一家達者で働きさへすれば、お前が大きくなる頃には人手に渡つた土地も買戻す事ができる。これで祖先に申譯が立つといふものだ。」
一家には和やかな空氣が漲つた。むつつり者の佐吉も、父や弟達の無邪氣な笑ひにつり込まれて思はず微笑むのであつたが、ふと發明の事が頭に浮ぶと急に胸が苦しくなつて、つい物思ひに耽り耽りするのであつた。



とんどんからり、とんからり

家の中から爽かな箴の音が聞える。裏の物干竿には弟の緋と父の紺股引とが初夏の微風にゆれてゐる。

「ああ、今日も亦お母さんは機織りか。一反織るのにどんなに働かねばならぬことか。少しばかりの賃銀を儲けるために、あのやうに朝早くから晩遅くまで根氣をつめては、さぞ腰が痛むことであらう。肩が凝る事であらう。あの『ばつたんはたご』をどう改良したら立派な機械にする事ができるであらうか……。」

佐吉は眼を閉じた。母の苦勞を思ふ度に、西國立志編の發明家の苦心が臉に浮んでくる。そして眼の底には、黒煙を吐く大工場に、こみ入つた機械が轟轟と唸を立てて動いてゐる。白い布が流れる様に織れて行く。幻を追ふその口元にうつとりと微笑が浮んでゐる。と突然彼の背後から

「佐吉、早く仕事をしないか。」

鋭い父の聲にはつと我に歸つた彼は、あわてて鉋を握つた。

或晩の事である。外から遅く歸つた彼は、父の前に神妙に坐らせられた。

「どこをいつまでうろつき廻つてゐたのだ。此の頃仕事は懶ける、夜遊びはする、俺達が毎日苦勞してゐるのがわからぬのか。折角田畑も買戻さうとしてゐる最中に……何でもお母さんに聞くと、發明とやらを考へてゐるさうだが、そんな夢みたいな事に

力を入れて何になる。第一そんな事は學問のある人のする事だ。小學校を出たばかりのお前に何が出来る。」

父の語氣は荒かつた。

「佐吉や、お父さんが叱るのもお前の事や家の事を思つてだよ。決して無理な望を持つてくれるな。わかつたら早く寝なさい。」

母は傍から優しく窘めた。孝心深い彼は、勿論父母の言葉に背きたくはなかつた。けれども機織り機械を發明したい望みは、火の様に彼の胸中に燃えて、どうしても抑へることは出来なかつた。外國には立派な機械があるのに日本にだけそれがない……。どう考へても佐吉には残念な事であつた。

「俺の腕できつと發明して見せる——。」

父から受けた生來の負けじ魂が手傳つて、彼の決心は日を追うて固くなつて行つた。晝間は父を助けて一心に働いたが、夜になるとこつそり裏山の物置小屋に忍んで行つては、小さな機織り機械を仕組むのに餘念がなかつた。

眼を明いてゐる限りは、何か考へ事に耽つてゐる彼を見て、何時か村人は氣が狂つたのでないかと言ひ出した。半氣違になつたのだとも譏つた。かうした風評はいつの間にか母の耳へも入つて、それを聞く度に母は胸元に釘を打たれる思がした。そして何度思ひ止まる様説いてみても、一向に利目がなかつた。果はこの初志を貫徹する迄は、誰が何と言つても止めない覺悟だと言ひ出した。母も佐吉の決心を知つてからは、もうそれ以上責める事をしなかつた。或日

「こんなことでは、お前も家に居たつて色々つらい事があらうし、又發明の邪魔にもならうから、横須賀といふ町に、この村から出た佐原谷藏さんといふ人がある、そこを頼つて行つて修行しながら研究とやらをしなさい。お父さんにはお母さんからよく断つてあげるから……。」

今は勵ましてくれる母の言葉に力を得た彼は、間もなく出立する事になつた。驛で別れを惜んだ時、母がそつと渡してくれた辨當をひらいて見ると、一通の封筒が出た。封を切ると手紙と一緒に紙幣が五六枚出て來た。

「佐吉よ、母はお前が村の人から笑はれてゐるので、その中には村に居れなくなる時がくると思つた。そしてその時には金があると思つたので、一年ばかり前から機を織つた金を蓄めたのだ。この金でしつかり研究とやらをしなさい。決して短氣を起すではない。村の人が何と言つて嗤はうと母だけはお前をいつも待つてゐます。お前が病氣をしないやうに、立派な發明ができるやうに祈つてゐます。母より」

讀んでゆく佐吉の眼からは、とめどもなく熱い涙が出た。母の眞情が切切として胸に迫つた。

「お母さん、きつとやります。待つてゐて下さい……。」

遙かに遠ざかつた故郷の山山を眺めて、彼は車窓の陰から強い決心の拳を固めた。

横須賀に來た佐吉は、佐原さんの親切で色々便宜を與へられた。同じ大工の仕事をしながら、ひまひまに造船所や器械工場の見學を試みては、一心不亂に發明にとりかかつた。併しあまり過度の勉強が祟つて、たうとう重い神經衰弱にかかつて、止むなく故郷に歸らねばならなかつた。半歳振りにふらふらと歸つて來た彼を見て村人は

「いよいよ氣ちがひになつた。」

と言つて嘲つた。負けじ魂の彼も今はどうする事も出来ない。慰める母の心を思へば思ふ程、ただ滅入るばかりであつた。

或日のこと、恩師佐田先生にこの心境を打明けた。

「さうか、君はそんな苦勞をしてゐたのか。併し失望してはならぬぞ。この大空も時には曇つたり、嵐になつたりする事がある。けれども雲の上には何時も變らぬ太陽が輝いてゐるのだ。人生もこれと同じで晴れた日ばかりではない。時には大嵐に出會ふ事もあらうが、決して明日の希望を捨ててはならぬ。希望を捨てた人間に進歩があらう筈はない。君は今この大嵐に揉まれて道を見失つて迷つてゐるのだ。精一杯の勇猛心を起して進むのだ。」

懇懇と諭される先生の言葉に、今更のやうに自分の薄志を恥ぢた彼は、百萬の味方を得た氣持で再び裏山の物置小屋に立籠つて、改良はたこの研究に熱中した。蒼ざめてゐた顔にもだんだん生氣が溢れて來た。



白い息が流れた。指先が凍る様に冷たかつた。今迄に何度設計圖を破り棄てたことであらう。春以來何度組立て直したことであらう。けれども一臺として満足な改良はたごは出来なかつた。こんなにも頼りない自分かど、組直した機の上にうつ伏して何度泣いたか知れない彼であつた。けれどもその都度不思議と先生の嘯ましの聲が耳に蘇つてきたり、完成を念ずる母の姿が眼に浮んだりして、はつと我に返つては又鑿を取直して來たのである。

明治二十二年、これは日本にとつて歴史上特筆すべき年である。それは二月十一日紀元節の佳辰を下して帝國憲法が發布せられたのである。これを記念する爲、當時東京上野不忍池畔に内國勸業博覽會が開催せられて、國內の人氣を呼んでゐた。毎日の新聞紙上にはこの事が大きな見出しで紹介されてゐた。佐吉はこの記事を見て、特に機械館の誘惑が寝ても覺めても離れなかつた。たうとう母に無心して上京が叶ひ、連日博覽會へ通つた。機械館には當時の人人を驚かすに足る大小様様の素晴らしい機械が陳列されてあつた。彼は終日機械館を何回も何回も歩き廻つて、これはといふ機械の構造を片端から寫生した。時たま機械が運轉される時には、恰も吸ひ着けられた様に、最前列に土下座

して凝視してゐた。そんな事が十日も續くと、看守人も彼に不審を抱き始めた。果は詰所へ伴れて行かれて詰問を受けた。

「兎に角、こんなに混雜する中に何時までもうろついて居られては困るから早く出て貰ひたい。」

と退場を迫られた時、流石温良な彼も嚇となつて

「退場せよとは何事だ。君も日本人だつたら一應この機械をしらべて見給へ。この機械は全部外國製ではないか。日本人の手に成つたものが一つでもあるか。君はこれを口惜しいとは思はんか……。」

こんな身窄らしい田舎の青年にこの覺醒の言葉を聞かうなどと思つてゐなかつた看守人は、それからは理解を持つて心よく見せてくれた。かうした熱心な見學をして或るヒントを得た彼は、すぐ家に歸つて直ちに前の改良はたごを組立にかかつた。あらん限りの勇猛心を起して一心に仕事を續けた。この時彼の心頭に徂徠するものは唯一つの

「外國人に負けてなるものか。」
といふ生來の不負魂であつた。



澄み切つた空には白い雲が一つ浮んで悠悠と流れてゐる。三遠の山山が紅をさしてくつきりと空際に浮んでゐる。風もない暖い小春日である。

今朝も早くから物置小屋で設計圖に見入つてゐた佐吉は、急に立上つて鑿をさるや否や一心に仕事を始めた。何か確信を得たのであらう。春以來何度も組立直して改良織機の大体は殆ど完成したが、どうしても一番大切な布の織れる部分だけが考案出来なかつたのだ。

夕方になつて漸くの事考へ通りやつて見たが、それでも織機は思ふ様に動かなかつた。

「うむ又駄目だ……。」

血の滲む様な二ヶ月の苦心が水泡に歸したのかと思ふと、彼は餘程口惜しかつたと見え、我れ知らず大きな槌を振り上げて一打ちに打碎いてしまはうとした時である。

「佐吉——。何をするんぢや。」

ときびしい母の聲がした。晝になつても、晩方になつても食事に歸らないのを心配して

物置小屋まで来て見るごこの始末なので、母はきつく彼を窘めて

「兎に角もう日も暮れたのだから、このまま歸つて今夜は早くお休み、そして明日の朝又考へ直すがい。」

母は無理に連れて家に歸つた。

其の夜更、どうしても眠れない彼は、又そつと家を抜け出して物置小屋に来て、微かなカンテラの光の中に黙々と組立直してゆくのであつた。



それから十二日目の朝であつた。

「お母さん、できた、できました！」

裏口から叫んで走り込んだ慌しい佐吉の姿に、母は臺所から轉げるやうに駈出して来て

「えつ、できた？」

佐吉は母の手を取つて走るやうに物置小屋に来て、見事に出来上つた改良機を示した。

母は暫くは嬉しさうに機械のあちらこちらを撫で廻してゐたが、やがて靜かにふり向く

と面癩れした佐吉の顔をしみじみと見入るのであつた。

翌朝早く佐吉は改良織機を手車に積んで、いそいそと峠を越した。車の後押をする母の顔も秋の陽に輝いて見えた。

織屋の尾崎は前から佐吉の發明に力を入れてゐて、この時までにもう三臺までも彼の造つた器械を試したのだが、どれもこれも思はしくなかつた。今度のも實地の使用に適するかどうか一抹の不安はあつたが、すぐ仕度にとりかかつて試織してみる事にした。

滑かな梭の走り、調子のよい篋の音、むらもなく美事に機は織られて行く。一尺、二尺……。

じつと見凝める佐吉の顔、出来榮え如何にと機にしがみついて蹲まる母の顔、思へば佐吉母子にとつては何とも言ひ得ぬ苦しい數年間であつたのだ。ああ、母子の上に喜びの日は遂に來たのだ。



時は明治二十三年十一月。佐吉が二十四才の時である。この最初の發明は翌年見事に

特許権を得た。世間でいふ豊田式人力織機がこれである。かうして彼の第一歩は正に踏み出されたのである。佐吉の瞳に新しい希望が輝き初めると、日頃苦り切つてゐた父もすつかり喜んで、それからは佐吉が自由に研究する事を許したばかりでなく、その後は進んで勵したので、佐吉はいよいよその道に奮發した。蔭口を言つた村の人人も佐吉の眞剣さに今更ながら感じて、果は村の譽れだとも喜んで。佐吉は佐吉で

「何糞。外國人になんか負けるものか。きつと日本を救ふ程の立派なものにして見せるぞ。」

と益々旺んな意氣に燃えた。彼は一心不亂に、夜となく晝となくよりよき織機の發明に没頭した。併し難所はまだまだいくらも彼の前途を阻んでゐた。非常な艱難や侮辱に出會ふ度に、いつも祖國日本を思ひ出しては奮ひ起つた。そして數十種の發明を次々と成遂げた上、大正十五年には遂に世界に誇る「豊田式自動織機」を完成したのであつた。

——碧海郡龜城尋常高等小學校 久野長松——

一五、明治川神社



「農業王國」「日本のデンマーク」と絶讃される、今日の愛知縣碧海郡の繁榮の基礎を築いたのは、都築彌厚翁その人である。

彌厚翁の父は也更やかと稱して、代代清酒の醸造を業としてゐたので、翁もその業をついで、毎日何くれとなく下男や家夫を指圖しては、家業にはげんでゐた。そのため翁の代になつてから家業は益々榮えて、その醸造高も一ヶ年五千石の餘にも達し、銘酒玉泉たまいづみ和歌泉、松緑せうりよくなどは、當時關西方面にまで鳴響いた程であつた。

彌厚翁は、明和二年今の東海道線安城驛から程近い和泉村に生れ、幼少の頃から學問が好きで、常に讀書と修養とを怠らなかつた。そして一度斯うときめた事は、どこまでも成し遂げるといふ不撓不屈の精神と、事に當つては剛毅果斷の人で、従つて家業の醸酒についても、常に全力を擧げてその改良と、販路の擴張とに努めたのであつた。それ

に又一面には父の血を引いて義侠心に富んでゐたので、常に村人の尊敬の的になつてゐた。翁が四十二才の時には、苗字帯刀を許され代官職となり、武士の待遇を受けられたことによつても、翁の並でない人格を窺ふことが出来る。翁は家運の繁榮に努めたばかりではなく、更に村の榮えや國の榮を人一倍に祈り願つてゐたのである。家業が清酒の醸造である翁は、醸造の原料である酒米を農民から求めねばならなかつたので、農民の榮と百姓の幸福のためには常に精一杯の努力もし、且つ研究も怠らなかつた。



一體その頃の碧海郡地方は、農業王國と稱へられる今の碧海郡とは、似ても似つかぬ寒村ばかりであつた。碧海郡地方の地圖を擴げて見れば一目でわかる様に、北方には丘陵性の臺地があり、南方には平野が衣ヶ浦までずつと連つてゐる。東部の矢作川沿岸の小部分を除けば、殆ど松林や小松原の茫漠とした荒野であつて、そのうちでも翁の生家附近の安城ヶ原などは、晝でも狐や狸が出るほどの、手のつけられない荒地であつたのである。

村落は、この荒野の中に點在してゐたが、不良土に加へて、水利の便が無いので、林間や荒野の低地に僅かな田を作り、溜池や井戸を掘つて稻を作つたのであつた。そんな有様でその收穫は至つて乏しく、一戸當りの産米が二三十俵に過ぎず、一家を擧げて二三反か四五反の田を耕せば、それが關の山であつた。平時はそれでも、畑作と共にどうかその日の生計は立つたけれども、一朝凶作にあへば全く餓死するより外にないのであつた。然も各藩では農家に重税を課したので、小作農はもとより、地主でも領主に収める年貢を差引けば、幾らも手に残らぬ程であつた。さうした農民の苦難を知りすぎる程知つてゐた彌厚翁であつたから、何とかして、不幸な農村の人人を救はねばならぬといふことが常に翁の念頭に深く刻まれてゐたのである。

文化六年の正月も過ぎた或る日、翁は用事があつて、隣村の平坂村を通りかかつたのである。その時、矢作川沿岸地三百町歩の開鑿をして評判の高かつた、東浦村の伊藤庄左衛門に逢つた。庄左衛門は翁に向つて

「貴殿の財力と力量を以て、矢作川の水を上流から分疏して、郡内に引き入れたならば、きつと碧海郡は立派な水田が澤山出来るでせう。」

と語つたのである。翁はなる程と思ひ、家に歸つてからも、晝間庄左衛門の云つた事を幾度も思ひ浮かべてみるのであつた。そして心に固く決する處があつた。

かうして、あの明治用水開鑿の大事業は、彌厚翁の燃える様な救農村の大精神によつて、その第一歩が踏み出される事になつたのである。



彌厚翁は、一世の大事業である明治用水開鑿の決心がつくと、着着と其の準備に取掛つた。

現今どちがつて、正確な地圖なども無い時代の事とて、翁は何はともあれ、實地を視察せねばならぬと、あの五尺にも足りない小軀を馬に跨つて、毎日近隣の視察に出かけて行つた。その結果、翁は、西加茂郡越戸村に於て、矢作川の水を分疏して、これを安城ヶ原に導き更に二分して一つを藤井村、一つを吉濱・高濱の間を経て衣ヶ浦へ流す幹線を作り、その二本の幹線から無数の支流を設けて、碧海全郡に灌漑して、あの茫漠とした荒地や荒野を開墾して、十萬餘石の米の收穫を得ようと思へた。

さうかうしてゐる間に、その年も暮れ、文化七年の春になつた。翁は遙遙伊勢の皇太神宮へ、成功祈願の參詣に出かけた。參拜を終へて歸宅した翁は、其の當時、數學と測量の大家であつた石川喜平氏の宅を訪べれ、自分の志を語り土地の測量を依頼した。併し石川氏は、翁の志のあまりにも大きく、まるで夢の様な話だつたので、初めは本當にもしない程であつた。そして仲翁の求めに應じようともしなかつた。けれども、翁の燃える様な救農興村の精神と、一身一家を犠牲にしてもよいといふ義侠心とに感激して遂に承諾したのであつた。

「有難うございます。有難うございます。これで私も安心致しました……。」
と、翁は鬼の首でも取つた様に喜び、石川氏に幾度もお禮をのべるのであつた。



石川氏に測量を依頼した翁は、先づ領主諸侯を訪ねて、用水開鑿の急務を説いて、其の許可を請ふ事にしたが、これが又、一大難事であつたのである。といふのは翁の心を汲んで心よく許してくれる領主が一人も無かつたからである。

當時碧海郡には十三諸侯の采地があり、それが錯雑入り組んで、各、その利害を異にするばかりでなく、この外に二百七十餘の寺領と、八十餘の神社領とがあつて、どこから手をつけて良いかわからなかつた。それに加へて彌厚翁の計畫が餘りにも大きかつたものであるから、諸侯や寺領、社領の係の者が早速許可してくれぬのも無理の無い事であつた。併し翁の決心は金鐵の様に固かつた。翁は私財を抛つて、明けても暮れでも、それらの諸侯や係の者を、一一説得して廻つた。

東奔西走、全く文字通りの努力が續いた。それでも、同意を得て我家へ歸る時は、暗い夜道も心明るかたつたけれども、思ふ通りの結果が得られぬ時など、心身共に暗闇を辿る思ひであつた。



遂に彌厚翁の努力は石川氏の好意によつて、いよいよ實地測量に取かかる運びとなつた。この測量にも、前に劣らぬ難關が横はつてゐたのである。それは暗愚の農民——殊に海岸部村落の漁業者達が、用水を掘れば矢作川の土砂を海に流出して、漁船の航行の

便を妨げ、漁業が衰へると云つて、猛烈に反對運動を起したのである。又或る地方では矢作川の水を引き入れれば、碧海郡は湖水になつてしまふ、といつて反對する者もあつた。翁は、そんな事は少しも豫期しなかつた事なので、これには少からず面喰つたが、翁の決心はそのためにも揺ぐやうな事はなかつた。翁はこれ等の人人を説得させると共に、前途を慮つて、遂に晝間の測量を中止し、夜間の測量を初めた。人目を避けての夜間測量であるので、勿論提灯など携帶は出來ず、僅に火繩の乏しい光で、不完全な測量器によつての測量であるだけに、その苦心、その努力に至つては全く血と汗の苦闘であつた。しかも、その夜間測量も時には村人達に發見せられ、頑迷な農民達は、手に手に竹槍を持つて翁を襲つた事さへあつた。翁は民家の床下に隠れたり、小松原に野宿の夢を結んでその難を逃れたことも幾夜となくあつた。

「いつそ用水開鑿を中止しようか。」

と、梢吹く松風も冷え冷えと身にしみる曉方に、野宿の夢から覺めた翁は、ふとかうした心細い考を起す事もあつたけれども、農民の將來の幸福を思ふと、又一大勇猛心をふるひ起すのであつた。

かくて、迫害と忍苦の五年目の文政九年には、遂に測量全部を完成する事が出来たが、翁はその時すでに六十二才になつてゐた。

翌文政十年の秋十月、翁は測量圖を携へて、遙遙と江戸に下り、用水工事申請書を勘定奉行の許に提出した。次いで文政十二年、幕府は役人を派して用水路の實地檢分をなし、更に天保三年には、遠州中泉代官平岡彦兵衛の再檢分があつて、天保四年に至り、漸く用水開鑿計畫が認可せられたのであつた。それと共に五ヶ野原六十町歩の開鑿も許された。苦心十餘年、翁の努力と忍苦は遂に酬いられたのである。

處が用水開鑿の許可があつたと知つた村民達は前にも増して反對し出した。翁はそのために生命の危険さへあつたが、翁の初志はいよいよ固かつた。

「農民が反對するのは、自分の不徳のためである。」

翁はかう考へて、心靜かにその鎮撫につとめたのであつた。

東の村を宣撫すれば西の村が騒ぐ、今日説得した村も明日は又再び騒ぐといふ有様で西に行き東に奔り、夜となく晝となくひたすらに宣撫につとめたのであつた。



天保四年八月の中頃であつた。都築彌厚翁は、過勞がもとで遂に病床に就いてしまつた。

「何、これ位の病氣など、三日も経てば必ず全快するにちがひない。」

と、翁は初めはそんな風に思つて、病氣の事など大して氣にも留めずにあつたのであつた。併し何といつてももう六十九才にもなる老體、三日経つても五日経ても十日過ぎて、病氣は一向に快方に向はなかつた。

そればかりではなく、その年は珍らしい程の暑さだつた。八月の中旬といへば曆の上ではもう秋であつたけれども、健康な者でも耐へられない程に残暑が酷かつたので翁は、ごつと病床に就いたなり、もう起上る氣力もなく病床に呻吟してゐた。

元來が五尺にも足りない程の小軀の翁であり、來年は古稀を迎へようとする老體の翁、その上に残暑と病氣に苦しむ翁は、全く見違へる程瘠せ衰へてしまつた。併しその人並より廣大な額と、不撓不屈の精神を現した兩の瞳は、何時もと變りなく炯炯として人を射る様に輝いてゐた。それが却つていたましい姿と見られた。

翁は今日もまた、ざらざらと油汗のにじむ様な残暑を耐へながら、近頃めつきり瘠せ細つた兩腕を、物憂さうに撫でながら、全生命と全財産とを注いで來た二十年餘の血のにじむ様な自分の努力を思ふともなく思ふのであつた。

「何くそ、明日は起きるぞ！ 起きんでどうなるものか、自分が完成せんで、誰があの明治用水の開鑿をするのだ……。」

心では強く強くさう思ひながらも、病弱の身は翁の心だけではどうすることも出来なかつた。明る日も、その明る日も、翁は起き上る事は出来なかつた。そればかりではない。日毎に自分の身体から力が抜けて、瘠せ細つてゆくのが、自分にもはつきりとわかるのであつた。

彌厚翁は、それを思ふと、遺瀨ない心の悶を木の棒か何かで引搔廻しても見たい様に、苛苛するのであつた。併し宿命とでもいふのか、翁がいくら焦り、腕うでいてみたところ、それはどうにもなる事ではなかつた。

其の年の九月半も過ぎ、五ヶ野原を色ざる樺紅葉が風に翻る夕つ方、六十九才を一期として、忍苦の一生を終へた。

翁は臨終の時、二男官四郎を枕頭に呼び

「自分は今、事業半で此の世を去るのは、實に残念である、が然しこれも運命で止むを得ない。たとへ自分はここで果てることも、我が精神は決して亡びない。お前は病弱の身ではあるが、自分の子であるから我が亡き後は、一身を賭しても自分の遺業を大成せよ。それがお前の父に對する一番の孝行である。」

と固く遺言したのであつた。



彌厚翁の歿後、官四郎が家計を調査すると、二萬五千兩近い借金があつた。官四郎は家財全部を賣拂つて、この莫大な父の借金を返済した。これが爲に、二十餘年前までは近隣に響く程の資産家であつた都築家も明日の食物にさへ困る無一物となり、養母は親戚へ引きこり、官四郎は剃髪して佛門に入つて父の菩提を弔つた。

彌厚翁が歿してから星霜は移り變つて三十年、隣村の新川村の岡本兵松、碧海郡北部の阿彌陀堂村の伊豫田與八郎等が出て翁の遺志を繼ぎ、用水開鑿の許可を幕府に出願し

た。その間に、世は皇政復古となり明治維新となった。

その後、明治九年に總工費七萬五千餘圓を以て許可されたが、勿論縣郡の補助は少しも受けなかつたので、岡本、伊豫田の兩氏は全財産をなげうつて金を借入れ、明治十二年一月に着工して安城村今村上倉池までの新水路第一期工事を終つたのが、同年四月十八日であつた。

それ以來今日まで年と共に大小の幹線分流が開鑿せられて、往年の荒野は見る見る墾かれて一萬餘町歩の美田良圃となり、遂に——農業王國碧海——と呼ばれ、日本のデンマークと稱せられるまでになつた。

嗚呼、千辛萬苦、七十年の一生を費し、事業の半で他界した彌厚翁も、恐らく地下で微笑んでゐる事であらう。



かくて明治十三年四月十八日、用水開鑿竣功祝賀の式典が行はれ、神社の創建となり、水に由緒の深い、みくまりのかみ大水^{みくまりのかみ}上祖神、たかおのかみ水分神、たかおのかみ高靈神の三柱を祭神として、明治川神社が創建

され、大正二年十一月、陸軍特別大演習が尾三の地で行はれた時、畏くも大正天皇が愛知縣下へ行幸あらせられ、十一月十七日、彌厚翁の生前の勳功を聞召され、贈從五位の有難い御沙汰を拜し、大正四年には都築彌厚翁を、明治川神社に合祀せらるるに至つた。

尙同年、大正天皇御即位の大典をあげさせられた際、碧海郡が大嘗祭悠紀齋田に選定されたのを記念に、翁の出生地明治村和泉に翁の銅像が建設された。

伊豫田與八郎、岡本兵松兩氏は、他の七名の功勞者と共に、生存中から狐島の地に神に祀られ、明治十六年十月二十七日には、兩翁に藍綬褒賞が下賜せられ、明治十八年には、狐島の社を明治川神社境内に遷され、末社伊佐雄社と稱するに至つた。伊豫田與八郎は其の後明治二十八年二月七十四歳で歿したが、昭和三年十一月十日贈從五位の御沙汰があつた。

——東加茂郡下山村 山本紫水——

昭和十五年十二月二十日印刷
昭和十五年十二月二十五日發行

尾三雄魂錄

定價金七拾錢

著作者 愛知縣教育會

發行兼印刷者 谷口正太郎

印刷所 秀文社

名古屋市中區新榮町三丁目

發行所 正文館書店

電話中局四二七三番
振替名古屋一四五番



當店發行 of 圖書は澤山製本準備あり賣捌店に品切の節は直接發行所へ御申込を乞ふ

409
479

終

正文館
版文